

## 北村節子

# エベレストに触れた「元・ハイジ」

標高8848メートル、世界最高峰のエベレスト(チョモランマ)。

ヒラリーとテンジンが初登頂に成功してから50年余り。装備や技術の発達ですっかり大衆化した感があるが、やはり宇宙に近い過酷な世界だ。

北村節子さんは今から30年近くも前、そのエベレストにアタックした数少ない日本女性の一人である。それも女性ばかりの隊の一員として。さぞかしパワフルな男勝りのつわものと思いきや、へえ、この人が世界最高峰挑戦チームのメンバー？

利発でちよつとおきゃんな女学生がそのまま中年になったような、気さくな笑顔の女性が目の前に立っている。



ちよつと年いつた都会的なお嬢様

山梨にある北村さんご夫妻の、こざつぱりとして心地のいい週末の家。林の向こうには甲斐駒ヶ岳がシャープな稜線を描き、新しい季節の訪れを告げている。爽やかな晩春のテラスでランチが始まった。

ペランダのテーブルに、ご主人お手製の「山小屋風ボルシチ」が並

女だけでやろつよ

北村さんはお茶の水女子大学を卒業後、読売新聞社に入社した。社会部の駆け出し記者だったとき、山岳同人「女子登攀クラブ」にエベレスト登山の許可がおりたことを知り取材に行く。そこで出会ったのが田部井淳子さんである。

彼女はすでに、一九七〇年、アンナプルナ(7577メートル)初登頂のタイトルを手に入っていた。

奥多摩の鳩ノ巣に集結した女子隊に初見参したときに田部井さんに会い、北村さんはその2、3日後には埼玉県・川越市にある彼女の自宅を訪れている。そこで二人は、取材する側、される側の境界を越えて長時間にわたって話し込んだ。

「やけに元気がいいよな、この人の声は。しかし、このエネルギー、いったい何食べてんだろつ」という田部井さんに対する関心が、「私はこの人が好きだな」という気持ちに変わるのに時間はかからなかった。北村さんは語る。

「あとで思いついた理由は二つ。一つは、田部井さんが福島、私が長野という田舎出身であること。もう一つは、共に女性としてはちと波乱万丈好きであったこと。つまり、人工物の固まりのような都会の息苦しさ、そして、女性はこうしてりゃいいの、という世間の押し付けから逃れたいという想いが、二人を意気投合させたんじゃないか、と」

田部井さんは子育ての真ん中だった。にもかかわらず、英文タイピストの仕事をしながら資金を蓄え、エベレストに挑戦しよう



きたむら せつこ:1949年生まれ。1972年お茶の水女子大学文教育学部史学科卒。同年読売新聞社入社、編集局社会部配属。婦人部、地方部八王子支局、電波報道部、生活情報部などを経て、2001年現職(調査研究本部主任研究員)。社外活動:慶應義塾大学メディアコム 兼任講師。国税庁国税審議会 酒類分科会 委員、内閣府 男女共同参画基本問題専門調査会専門委員など。著書、論文:『ピッケルと口紅』(東京新聞社)、『諸外国における働く母親とその子供たち』(NHKブックス、『働く母親の時代』所収)、『縁辺労働力が現代の労働市場に及ぼすもの』(大蔵省印刷局『ワークスタイル革命』所収)ほか。

べられる。おいしい。野菜に味が染みて大地の香りがする。芽吹き始めた自然の下の味が、カントリー気分を醸し出す。

北村さんは、おしゃべりしながらフランスパンを切っている。その姿からは、女性登山家と聞いて思い浮かぶ「土っぽさ」がまるで感じられない。どう見てもちよつと年いつた都会的なお嬢様といった風情だ。

新聞記者という職業が、北村さんに山岳派の人に特有の大地の匂いが沁み込むことを許さ

なかったのだろう。しかし、この女性の明るい洒脱さ、鋭さを見せない切れの良さ、そしてやさしさと余裕は、結局、知性のなせるわざなのだとお話を伺っていて腑に落ちる。ただのお利口の知性で

はない。大口たたいて何もしいヤカラもいる世の中で、有言実行、少なくともエベレストに行つてしまつたのだ。

一九七五年。まだ日本人にとつては海外旅行が贅沢だった時代。ましてヒマラヤは特殊な人だけが行く別世界だった。エベレストも春と秋、各一隊の入山が許されていただけ。そこに、嫁に行くのが当たり前」とされていた女15人でのチャレンジだった。メンバーの田部井淳子さんが登頂を果たしたことで、チャレンジは、世界初の女性最高峰登頂」に結び付いたのだ。



(右)1975年、日本女子エベレスト登山隊の隊員として初めてヒマラヤへ(ネパール・ルート)。今思えば、貧しい装備で荷上げにがんばった。日中の雪やけ予防にガーゼで顔を覆って。  
(左)1983年、インド・ハヌマンティバ(5366m)へ女2人で登る。花の谷をさかのぼって雪氷の峰に至るすばらしいルートだった。  
(左は田部井淳子さん)

としていた。もちろん登攀の実力も経験も第一級である。北村さんは、しびれた。それがなかったら、北村さんの人生はもう少し違うものになっていただろう。北村さんは、しびれたままエベレスト登攀のメンバーに名乗りを上げたのだ。そのときのことを、田部井さんは北村さんの著書『ピッケルと口紅——女たちの地球山旅』の序文で次のように書いている。

登山計画を話し合う第一回合宿ミーティングに彼女は現れた。読売新聞の記者としてだ。化粧気のない私たちの集まりに、目元パツチリ画いた美女登場である。当時流行のミニスカート、首元におしゃれに結んだスカーフがヒラヒラ風になびき、一瞬私は「コヤツ、ナニモノ」と思った。が翌々日の電話にまたびつくり。「私を隊員にして下さい。お願いします。」ダト。聞けば松本出身で北アルプスのパトリールのバイトはしていたそうだが、本格的な山歴はないに等しい。押しの一手である。

(中略)マイイカと思った。  
しかしこの新人、エベレスト遠征では7000メートル以上まで荷揚げに貢献、ペテランが息切れし始めた後半戦では隊の主力を担うまでに急成長を遂げる。山恋いのエネルギーは加速し、その後のチベット・シヤパン、マツキンリー、南極、ニューギニアなどへの冒険行、そして休暇獲得ゲームについては、自著『ピッケルと口紅』に詳しい。カッコイイ話ばかりではなく女たちのすつたもんだも、なかなか凄まじいが、しかしそれ以上に、彼女たちの間で交わされる友情は、率直かつ明快で心打つ。

例えば親が目をむいて驚き、泣いて反対した結婚。結婚したその日から、いきなり小三の男の子の母親を務めることになった時のことを、北村さんはこんな風に書いている。

もちろん新聞記者の仕事は続く。昨日まで、夜中の一時、二時まで飲んで、朝は牛乳一本で会社に出かけ、週末ともなれば山だ、遠征の準備だ、と出歩いていた身が、朝七時、「はい、ジュン。早く起きようね。パンは何枚食べられそうかな」「忘れ物は無いかな」と、「にわかママ」をやるのは、まあ、面白くも楽しくもあつたが、軽いことではなかった。(中略)例えていえば八〇〇メートルの吹雪の稜線、ザイルもなく、間もなく日が暮れるという、まあ、そういう状況だったのである。



(左)1990年、スイス・マッターホルン(4477m)へ登頂後。95年にはアイガー(3970m)もクリアしたが、その後、グランド・ジョラスには失敗。宿題として残る。  
(右)1988年、北米大陸最高峰、マッキンリー(アラスカ)へ。海外登山では初めてスキーを使い、その有用性に瞠目。以来、山スキーが冬の楽しみに加わった。

## 日本は貴重な動植物の宝石箱

「地球上には地理的フロンティアはもうほとんどありません。GPSがあるし、たいていのところには行けますもの。エベレストだってそうです。1年の準備期間と1000万円のお金があれば、今の私でも登れちゃうかもしれない。でも、地図の塗りつぶし作業はもういいや。終わり。あとは、味わい方の開拓です」

どの山に行った、何千メートルの山頂を極めたというのではなく、そこに行つて何を感じとれるかを問う。自然を深く楽しめるか。もしもそこが踏み荒らしやゴミ捨てで生態系が損なわれていたら、少しでも元の姿に戻せるか。

一九九〇年には山岳自然保護団体の旗上げに参加。今も山のゴミや登山者の排泄物の問題に取り組む。微生物の働きが低下する高山では、排泄物が分解処理しにくくなる。そこで微生物で分解する装置をどう設けるか。いそ入山規制すべきか。今は議論のときである。

「山は一つの自然環境ラボラトリーです。温暖なアジア・モンスーン地帯にある日本は、地形変化にも富んでいて、動植物の垂直分布と水平分布のバリエーションが半端ではない。氷河期に棲息した生物が温暖化によって高山に追いつめられて、ヤリガタケシジミのように点状に残っているものもあります。この列島は、貴重な動植物が見られる宝石箱のようなもの。極地の岩や氷もいけど、今は自分たちの宝石を見て歩きたい気持ちが強くなりました」

「何千年もの雪が凝縮したエベレストのアイスフォールの色つて、すごくきれいな深いインクブルーなんです。南極の最高峰に登ったときは、見渡す限り白の世界。色彩がないから、夢なのか現実なのか分からない。ユーギニア島の最深处では、本当に裸の人々と野営しながら岩壁を目指しました。私はこれまで間違いなくとて

が、不思議なことに、もう20年も昔のあの日々を思い出すと、私は思わずほえんしてしまうのだ。いやあ、我ながら実に無鉄砲で元気がよかつたわい、と。そしてともかくもあの「吹雪の稜線」を切り抜けることができたのは、やっぱり彼女たちのおかげだ、と、改めてうれしくなるのだ。

彼女たち、つまりエベレスト登山の仲間たちである。子育て・仕事両立ピンチの嵐を、何度山仲間にも助けられたことだろう。出張の留守宅に泊り込んでくれる。総菜を持って夕食に来てくれる。資金集めから登攀まで、ともに苦労したからこそ得られた貴重なものが、北村さんの財産となっているのだ。

それにしても、なぜ女性ばかりなのか。

「冬山で重い荷物を背負って歩くときなどは、女性もけっこうねばるんです。でも、2メートルの壁を越えるときに必要なのは、筋肉の瞬発力。そういうとき、同行者が男だとこの荷物持ってくれてもいいじゃないと心のどこかで思っわけ。それをせ口にしたいんです。あれはアイツがいたからできたんだと思うより、コレコレだけど自分たちでやっただよねという気持ちが好きなの。可愛くないのよ」笑いながら女である出発点を見つめている。

「仕事ではずっと女性の労働問題などを扱ってきた、女であることに、普通の人よりこだわりがあると思います」

50歳を過ぎ、今はフルタイムの仕事を持つ山好き女性で組織する「森の女性会議」の代表幹事を務める。メンバーは50代を中心に30〜60代の約30人。霞が関の役人、公務員、先生、医者、弁護士、学者など肩書きはさまざまだが、フィールドに出て息抜きをし、そこで楽しんだことをエネルギーに、また日常に戻って働くという人が多い。ヒマフヤを目指した女子登攀クラブは登頂することが目的だった。森の女性会議のメンバーのプライオリティーは仕事にある。その違いはあるが、女性だけの満足度、女性ならではの楽しさを味わっている点は共通している。



北村さんご一家。体重38Kgとグラマーなゴールデンレトリバーのくるみちゃん(左)と、3歳のマルチーズ・雪丸くん。元読売新聞の記者で、現在は国際山岳年日本委員会事務長であるご主人の江本嘉伸氏と。

もいものを見てきたと思います」

だから青春に悔いはなし。若い頃は、高くてきれいなものが素敵に見えた。今は精妙なメカニズムでつながっている山野の虫や花・樹や鳥に「ほればれしてるの」と言う。

会社の仕事を卒業したらどうするか。学生時代ずっと美術部にいた北村さんにはモデルとして思い描いている女性の系譜がある。イギリスの湖水地方に住んで「ピーター・ラビット」を描き、ナショナル・トラストの生みの親の一人として社会事業もしたベアトリックス・ポッター。古い自動車に犬たちを乗せて、移動しながら自然を描いたカナダの画家エミリー・カー。農園を経営し、ガーデニングのかたわら、絵を描き続けているアメリカのターシャ・チューダー。

「彼女たちに共通しているのは、自然の中で動物と共にいて絵を描いていること。これって一挙三得じゃない？ 私もいずれば田舎で犬たちと養蜂をしながら絵を描くぞ、と思っています」

北アルプスの麓のレンゲ畑を犬と駆け回った至福の少女時代をもつ「元・ハイジ」環境方面のペンネーム。その夢は、エベレストから信州の山野に戻り、やがて新しい心の花を咲かせることだろう。

